5　山奥の金山跡に隠された徳川幕府御用金（群馬県）

一九九二（平成四）年の二月、ぼくは二十二年間にわたるサラリーマン生活にピリオドを打ち、フリーランサーの道を歩むことにした。

会社を辞めた理由はいろいろある。まず、会社での自分の仕事がなくなってきた。その気なら、居座り続けることはできただろうが、望みもしない役職に就かされ、苦手なカネの計算やら会議に出ることやらがおもな仕事になってくると、現場でものをつくるのがいちばん性分に合っているぼくとしては、だんだんしんどくなってきた。

また、副業のほうが忙しくなってきたこともある。このころすでに、月刊誌の連載を二本かかえていたし、単発の原稿依頼もちょくちょくあった。それに加え、前年の暮れから年明けにかけて、単行本を出さないかという話と、テレビのスペシャル番組とシリーズものへの企画協力依頼が立て続けに二つ舞い込んだ。シリーズものの一時間番組のほうは、できれば年内に二本はやりたいという。

埋蔵金ネタを求めるメディアからのコンタクトが、ぼくに集中するようになったわけは、とりもなおさず、前年にこの分野の権威だった畠山清行氏が亡くなったからである。そのころ、ほかにも埋蔵金探索者がある程度はいたが、情報をほかに漏らさぬよう文字どおり地下でやっている人が多く、畠山氏のように、収集した資料を綿密に分析し、実地に調査した成果を広く公表するタイプの人はほかにいなかった。そのまねごとみたいなことをやっていたのはぼくだけだ。群馬県の永井でいっしょに発掘を行ったときに、「ぼくの後継ぎはきみだな」と指名されたこともあり、一歩でも先生の域に近づこうと心がけてはいたものの、どうしても会社の仕事を優先させなければならず、思うように時間をつくることができなかった。ところが、まだまだ発展途上の未熟な埋蔵金研究家を、ポスト畠山として、あたかもこの道の第一人者であるかのように持ち上げて紹介するメディアも現れてくる。

（こういう人間も必要とされているようだから、この際、旗揚げするしかないか）

ぼくはそう決意した。畠山氏は長く病床にあったため、十年近く新しい著書は出していない。マニアのためにも、このへんで新しい情報を取り入れた本でも出しておくべきだろう。それに、同氏は著書からの盗用を防ぐため、人名、地名、数値などをわざと事実に反して記述した部分があるが、ぼくはそんな配慮をすることに疑問をもっていたので、ありったけの情報を整理して、より正確に世に伝えたいとも思う。そしていずれは、財宝探しを題材にした小説もじっくり書いてみたい。古今東西、この手の読み物はたくさん発表されているけれども、これまでの実体験に照らし合わせてみると、荒唐無稽のものが多すぎる。もっとリアリティがあって、しかもエキサイティングでエンターテインメント性豊かな作品が書けるはずだ。その材料はかなり蓄積している。

そんなわけで、ぼくは第二段のロケットに点火し、新しい世界へと飛び立った。

それにしても、いきなりやってきたメディアの攻勢はすごかった。畠山氏でさえ、こんなことは経験しなかったのではないだろうか。ただし、元ネタを提供し、あちらこちら引っ張り回されて忙しい思いをするわりには、テレビの企画料や出演料はわずかなもの。きっとタレントなんかのギャラのほうがずっと高くて、こちらはそのしわ寄せをくうのだろう。

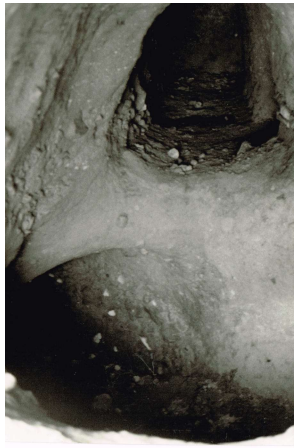
グチはさておき、当時は埋蔵金が一種のブームのようになっていた。その理由をバブル経済の崩壊と結びつけて説明する人もいたが、ほんとうのところはよくわからない。一般庶民が株や不動産転がしなどで大儲けできる奇々怪々な時代は終わったから、ほかに一攫千金が期待できるものとなると、宝くじか埋蔵金くらいしかないとでもいうのだろうか。実際には、埋蔵金を掘り当てたところで、それがすぐカネになるわけではならないのだが。

はっきりいえるのは、ブームの火付け役となったのがＴＢＳテレビの番組だったことだ。コピーライターの糸井重里氏をリーダーとする〈赤城山埋蔵金発掘プロジェクトチーム〉は、徳川幕府の御用金にターゲットを絞って、赤城山の麓の群馬県勢多郡赤城村（現渋川市赤城町）津久田で調査を開始し、まず、一九九〇（平成二）年から九二年にかけて『ギミア・ぶれいく』という番組でその経過をレポートした。これが大当たり。ぼくにも初期の段階でこの番組からお呼びがかかったが、まだ会社勤めをしていて時間がとれなかったので、出演を断った経緯がある。もし、ぼくが少しでもこれに関わっていたなら、あんなシロウトだましの番組の続行には異議を唱えたことだろう。なぜなら、『徳川埋蔵金大発掘』というタイトルの特番に昇格して、重機を使った大がかりな発掘に進展するきっかけとなったのが、地下深いところに現れた、複雑に掘られた縦穴や横穴だったからだ。番組では、それをあくまでも御用金の埋蔵工事と結びつけ、放映のたびに「穴の先にある黄金が今度は見つかる」というニュアンスの言葉を並べ立てて、全国の視聴者の目を画面に釘付けにした。そもそも、その場所を掘ることになったのは、アメリカから呼び寄せた超能力者の透視に基づくものだったという。

だが、あの穴が何であるか、周辺に昔から住んでいる古老ならわかっていただろうし、ぼくも知っていた。太平洋戦争前に、当時の近衛内閣のブレーンだった後藤隆之助氏が、在郷軍人（ふだんは農業などに従事しながら有事に備えて待機していた軍人）多数を動員し、徳川の埋蔵金探しを目的として掘らせたもので、その跡はほとんどそのまま残っている。ぼくは昭和五十年ごろに少し離れた場所から中に入ったこともある。まるでアリの巣のように穴が縦横に延々と掘られていて、三十メートルくらい入ったところで危険を感じて引き返してきた。さらに奥へ入れば、途中に目印をつけるか長いロープでも持っていない限り、出口がわからなくなってしまうだろう。ほんとうかどうか知らないが、総延長は二十五キロあると聞いた。

戦前のその発掘作業が物語るように、探す人はいくらでも深く掘りたがる。「あと一掘り、あと一掘り」が、何十メートルにもなっていくのだ。でも、ちょっと頭をひねればわかることだが、埋蔵金というものはふつう目的があって一時的に隠したものである。その時がきたら速やかに回収しな

筆者が昭和 50 年ごろに入った地下トンネル



ＴＢＳの番組のために掘られた巨大な穴。最終的には深さが 60 m に達した。

ければならない。だから、掘り出すのに何カ月も何年もかかるような深さに埋めるはずがない。また、埋蔵の際の作業は秘密裏に行うことが原則で、そのためには、少人数で短期間のうちに行う必要がある。人手が多くなればなるほど、時間がかかればかかるほど、秘密が漏れるリスクが高くなる。

そのことは、これまでの発見例をみれば明らかだ。たとえば一九六三年、東京都中央区新川で天保小判千九百枚、同二朱金約七万八千枚が見つかったことがある。「鹿嶋清兵衛の埋蔵金」といわれるもので、後にも先にもこれをしのぐ額のものは出ていない。その大埋宝でさえ、埋められていたのは地下一・五メートルだった。「えっ、そんなに浅いの？」と思われるかもしれないが、ほかはもっと浅いところ、だいたい地下五十センチ程度から掘り出されているのである。

こう説明すれば、埋蔵金探しに重機なんか必要ないことは子どもでもわかるだろう。第一、埋めた人は重機を使ったはずがないのだから。ところが、ＴＢＳの番組では重機が大活躍し、アームの先のバケットがむなしく土だけを掘り上げるのを、視聴者は延々と見せつけられた。これにカネがかかるのは当たり前で、一回分の制作費が数千万円に達していたという。もし、トレジャーハンターが同じことをしたなら大失敗だが、平均視聴率が二十パーセントを超えていたから、この世界では問題ないどころか大成功なのである。

ちょうどぼくが独立したころ、『徳川埋蔵金大発掘』は佳境に入っていた。そこで、テレビ朝日から二匹目のドジョウ狙いの埋蔵金ものの企画の相談があったとき、題材はほかのものでもよかったのだが、同じ徳川でほかにもっと有力な情報があるから、ＴＢＳに真っ向から挑戦状を突きつけることを提案した。そしてそれは採用され、ＴＢＳと差別化させるために、午後七時からのゴールデンアワーに、なんと現場から発掘生中継をやることが決まった。これが独立後の初仕事となる。

候補地は二カ所。一つは、千葉県市原市での発掘以来の仲間、古兵法研究家の山城赤心改め風倉龍之介氏の説にしたがうものだが、彼はすべてを明かしてはくれなかったので、ぼくにとってもまだ未知の場所だった。

風倉氏の説はこうである。

「徳川幕府の御用金は、『八門遁甲』という兵法に基づいて隠されている。その場所を探り当てるためには、まず全体の地形を俯瞰的に見ること。最初の大まかな目印として、赤城、榛名、妙義の上毛三山が選ばれていて、それぞれの山を結ぶ〈不動の線〉上に人工の物証がいくつか残されている。それらを丹念に探し出していけば、すべてがつながり、最終ポイント、つまり埋蔵地にたどり着くしかけになっている」

彼はすでに、複数の物証を発見し、最後の段階まできているようだった。ただ、なぜなのかその理由はわからないが、とても発掘できるような場所ではないと、しきりに残念がっていた。

「最後の場所にたどり着いたときは悔しかったですよ。そこを教えるわけにはいかないけど、あなたならわかるでしょう。テレビの撮影ということであれば、もしかしたら掘れるかもしれないし、きっとおもしろいものになると思いますよ」

その少し前、ぼくたちはある雑誌に、ＴＢＳの番組に対する見解を共同執筆の形で寄稿した。彼はあちらさんをけちょんけちょんにけなしたあと、調べたことの八割ほどを公開していた。あとの二割分に当たる重要な物証は伏せてあったが、ぼくにはおおよその見当

はついていたし、なんとか見つけることができるだろうという自信はあった。
もう一つは、ぼくが発掘ドキュメントを連載中の雑誌の出版社社長から紹介された、同県沼田市の研究家・高橋喜久雄氏の推理にもとづく場所だ。彼も古兵法を少しかじっていて、そこから導き出される解釈と、地元に残る言い伝え、自身の体験などから、昭和村の丸山（まるやま）が怪しいとにらんでいた。そこは片品（かたしな）川のほとりにあり、人工的な感じもする古墳状の小山だった。
二つの題材のうち、ぼく自身は風倉説を徹底的に追いかけることにした。実際の探索に近いリサーチをロケハンも兼ねて行い、最終的には一カ所に絞るつもりだった。三月に入ってもまだときおりみぞれが降る中、番組制作会社の若手のスタッフといっしょに、群馬県内各地を回り始めた。一カ月半もの間に、過酷な山歩きも経験。とくに妙義山は、本職の登山家たちのトレーニングコースになっているだけあって、かなりハードだった。
にもかかわらず、結果的にはこの探索行は失敗に終わった。理由は二つある。物証のうちの一点が、人工物と断定できなかったこと。もう一つは赤城山の一峰、鈴ヶ岳の麓に埋もれていた物証であるはずの石碑が、明治二十二年に建てられたもので、御用金とは無関係であることがわかったからだ。
しかたなく、別部隊が同時進行でリサーチをかけていた高橋氏の説を採用することにしたが、こちらも肝心の丸山の地主が、放映日の四月二十二日まで粘り強く交渉したものの、とうとう発掘の許可を出してくれず、結局は、別の地主が所有する丸山の脇の竹やぶを、お茶を濁すような形で掘るしかなかった。期待もしていなかったし、結果は推して知るべしである。
でも、あちらさんが超能力者のいうとおりに掘ってみたら、たまたま穴が見つかったから掘り続けたのに対し、こちらはさまざまな資料や伝承をもとにした推理を紹介するのが、番組の骨子となっていたから、埋蔵金探しのほんとうのおもしろさを知る人にとっては、ある程度好奇心を満足させる内容になったと、いまでも思っている。
そのちがいがはっきりとした形で現れたのは、放送後の反響だ。テレビ朝日や高橋氏自身に、徳川の御用金埋蔵に関連すると思われるさまざまな情報が、周辺の各地からもたらされたのである。自分が体験したこと、土地に残る伝承などで、そのうちの一つが、片品村の山中にある金井沢金山跡に関するものだった。

尾瀬国立公園への玄関口にあたる利根郡片品村は、良質の温泉をはじめ、スキーや山菜・キノコ採り、渓流釣りなどが楽しめる、大自然に恵まれた別天地である。村の中心地の鎌田からそのまま国道一二〇号を走ると、金精峠を越えて日光へ至る。北へ進むと、尾瀬沼から檜枝岐を経て会津へと導かれる。江戸時代はいずれも幕府にとって重要な街道だった。その山中に、戦国時代の後期、甲斐の武田氏によって開掘された金山の跡がある。地元には金山に関する古文書がたくさん残されていて、一九六三年に発行された『片品村史』に一部が掲載されている。最も新しい記録は元文年間のものだから、江戸時代の半ばごろには閉山になっていたようだが、場所によっては鉱石一トン中に百グラム以上の金が含まれていたとあるから、相当優秀な鉱山だったようだ。ただ、昭和の初めに調査のために入山した記録があるものの、以後は公式には確認されておらず、村史にも場所については「恐らく今日木や草の茂るにまかせてその跡すら発見に困難であろう」と記述されているだけ。

高橋氏もぼくも、もちろんそんな幻の金山の存在を知るはずがない。ところが、めったに人が入らない深い山奥に金山の跡があり、しかもそこに重大な秘密が隠されていることを教えてくれた人がいる。それが、同村で長く炭焼きなどの山仕事や温泉の掘削を行ってきた萩原徵氏だった。

同年の五月、萩原氏は高橋氏に電話をかけてきて、自分が金山の場所を知っていること、そして、幕末の動乱期にはすでに閉山になっていた金山の坑道内に、徳川方が新政府軍との一戦に備えて、軍用金の一部を隠したことを、自信たっぷりに語ったのである。高橋氏から報告を受けてすぐに、ぼくは詳しい話を聞くために、彼とともに当人を訪ねた。

萩原氏は当時七十二歳。古ぼけたシャツの下から、贅肉がまったくない日焼けした体がのぞき、くぼんだ眼にはまだ十分な鋭さが宿っていた。温泉を五本掘って三本掘り当て、民宿をやるつもりで建てた自宅には檜造りの浴室があり、当時は住まいの裏手にある源泉から、向かいにある旅館にも給湯していた。自宅から歩いて二十分ほどかかる山の中には、廃材を利用してセルフビルドした囲炉裏付きの小屋があり、ここで寝泊まりすることが多いという。小屋の内部はすすけていて粗末だったが、目の前に広がる菜園には、いろいろな野菜類が見事に育っていた。その暮らしぶりは、ぼくが若いころからずっと憧れていたものだった。

萩原翁はもう一つ、ボランティア活動家の顔をもっていた。ネパールの貧しい山村に学校を五校建設する資金を寄付し、年に何度か文房具類を届けに現地へ行っているようだった。ぼくが最初に訪ねたときも、自宅の玄関の上がりかまちには鉛筆や消しゴム、ノートなどがぎっしり詰まった段ボール箱が二個積まれていて、数日後にネパールへ飛ぶと聞いた。ネパールの国王（現在は王政は廃止）から贈られた感謝状や、国王といっしょに写った写真があったから、けっして作り話ではない。ただ、そういった活動のための資金は、温泉の権利がもとになってるものとばかり思っていたが、後にそうではなかったことを知る。

最初に聞いた話の要点だけを述べると、だいたい次のようになる。

◇昭和三十年代に山仕事仲間のH氏が「山でたいへんなものを見つけた。もうすぐ大金持ちになる」と口走り、直後に病気で死去。その男は、山中で文字と記号が彫られた岩を発見したといい、それを紙に写しとったものが残されていた。それには「子方へ入」という四文字と、三つの山が重なった形と滝の絵、そして鉱山記号のようなものが描かれていた。

◇金井沢の途中に「雄滝」と「雌滝」の二つの滝があり、手前の「雌滝」の脇を登らないと金山跡へは行けない。また、そこから東の方を見ると、絵のように三つの山が重なって見えるので、これは金山へのルートを示すものではないだろうか。

◇慶応四年（一八六八）の三月、片品の中心地鎌田付近で、千両箱と思われる木の箱を二個ずつ振り分けに背負わされた牛八頭が目撃されている。

萩原氏（左）の話を聞く。中央が筆者（1993 年夏）

◇昭和の初めに源華子と名乗る女性をリーダーとした白装束の一団が、徳川幕府の御用金の探索を目的として、鎌田付近で発掘を行ったことがある。

◇「おじうた向こうには宝がある。赤城財宝の一部」という言い伝えがある。「おじうた」は「宇条田峠（うじょうた）」が訛ったもので、その向こうというと同村花咲（はなさく）地区か、その北方の金山跡のある場所をさすと思われる。

以上が、萩原翁が金井沢金山跡と徳川の御用金埋蔵を結びつける根拠となっていたが、いくつかの疑問があった。まず岩絵を残したのは誰か。御用金を埋蔵した人物ではないだろう。ツルハシを二本交差させた鉱山記号は、幕末にはまだなかった。また、金山跡に御用金が運び込まれたとしたら、その運搬ルートは金井沢沿いではない。ぼくが調べた限りでは、かつては花咲方面から南斜面を登り、現在のホワイトワールド尾瀬岩鞍というスキー場を横切る山道があり、牛も歩けるほどだったというから、そのルートを使ったはずだ。岩絵はもともと存在せず、金井沢ルートで金山跡を発見したH氏が、自分のために残した覚え書きではないだろうか。そう考えるとつじつまが合う。

それから、「赤城財宝」という言葉が登場するが、徳川の埋蔵金の別名をそういうようになったのは、赤城山麓で探索が始まってからかなり後のことだから、片品でそういうわさが広まった時期と合わないような気がする。

その年の夏だけでも、ぼくが単独だったり、高橋氏やその仲間といっしょだったり、何度か萩原翁に会うことになったのだが、話が断片的で脈絡を欠く部分もあり、人から聞いた話なのか、自身が体験したことなのかがはっきりしない点もあった。それでも幻の金山跡はどうしても見ておきたいという気持ちがあったので、できるだけ早い機会に案内してもらうことにした。

同年の秋、ぼくは高橋氏とその仲間数人とともに、初めて金山のある山中に分け入った。案内がなければ、とうてい辿り着くことができないようなところだということは、歩き始めて十分もたたないうちにわかったが、ぼく自身まだ四十五歳と若かったし、さほど厳しい登山だった記憶はない。

渓流を何度かまたぎ、高さ五十メートルほどの滝の脇を、木の根や岩の出っ張りにすがってよじ登り、熊笹をかき分け、二時間ほどかけて辿り着いたところは、途中のうっそうとした感じとはちがって開けた明るい場所で、沢沿いにテラス状の広場のようなところもあった。そしてそこには直径四十センチほどの石臼が数個と、高さ六、七十センチと思われる石宮の土台と屋根が、離ればなれになって転がっていた。

土台の文字ははっきりしていて、中央に大きく「奉建立」、その左に「上州金井沢金山」、右に「寛保二歳八月吉日」と彫ってあった。寛保二歳（年）は一七四二年。そして、屋根の妻の部分には、くっきりと「金」の文字が浮き彫りにされていた、作ってから二百五十年もたっていることが信じられないほどの鮮明さだった。

テラス状の場所は当時の選鉱場の跡にちがいな

「金」という文字が彫られた石宮の屋根

い。ここで石臼を用いて金山から掘り出した鉱石を砕き、沢で揺り板か揺り盆を使って、砂金を揺り出すのと同じ方法で選鉱し、たまったら山から下ろし、どこかで精錬していたのだろう。萩原翁によると、土の下に直径一メートル以上ある巨大な石臼が埋もれているという。それが事実だとすると、人力ではとても動かせないから、家畜の力を借りていたことになる。やはりここまで、牛が通える道がついていたのだ。ぼくたちが辿った沢沿いのルートは百パーセント無理。いまのスキー場を横断する正規ルートがあったことは確実といえる。さらには、千両箱らしきものを二個ずつ背負わされた八頭の牛の目撃談が、俄然現実味を帯びてきた。

では、金山の跡はどこに？

萩原翁は、そこからさらに急斜面を百メートルほど登ったところにぼくたちを導いた。

「ここなんだけどね」

指さす方を見て、ぼくたちはあっけにとられた。目の前にはあるのは、草が生えた土砂崩れの跡のような斜面だけ。どこにも穴らしいものはない。

「上が崩れて入り口をふさいだんだよ」

（ということは、ここを掘らなくちゃいけないわけ？）

答えのわかっている問いを胸の中で発していた。が、次の瞬間にはそのための方法を考えていた。

およそひと月後、ぼくは何人かの知り合いにも声をかけ、高橋氏もまだ声変わりもしていない中学生の息子など、できる限りの仲間に動員をかけ、総勢約十名でショベルやツルハシなどを担いで山奥に向かった。萩原翁の案内はなかったが、前回から間をおかなかったこともあり、何とか自力で現場に辿り着くことができた。

そして日没時刻を気にしながら数時間、斜面に立ち向かった。しかし、地面に二、三センチの隙間があき、そこからたばこの煙が吸い込まれるので、穴があることは確認できるものの、それ以上掘ろうとすると上から激しく土砂がなだれ落ちてくる。同じことを何度か繰り返した末に、作業はそこまでにして、より効率的な方法を考えることになった。

現場は十一月に入ると雪に覆われると聞いていた。帰り道には小雪が舞い始めたから、もう年内の入山は無理だ。春が来るのも遅く、スキー場はゴールデンウィークまで滑ることができるくらいだから、リベンジするとしたら五月の末くらいからか。

この秋の二度の調査でわかったことがいくつかあった。一つはもちろん、ぼくたちが行った場所に、村も公式には確認していない金井沢金山の跡があるのが判明したこと。もう一つはっきりしたのは、岩に刻まれていたのかどうかは不明だが、H氏が描き残していたのは、やはり沢沿いに金山跡に入るルートを示したものだということ。滝がある分岐点から東の方角には、絵と同じように戸倉方面の三つの山が重なり合って見えるし、金山の入り口があるという現場は真北に向かった斜面だから、「子方へ入」と一致している。

ところが、翌年五月の調査再開を計画していたものの、その年だけでなく、なんと十四年もの長い間、ぼくたちは金山の入り口をあけるための工事に再チャレンジすることはなかった。上からなだれ落ちてくる土砂を止める技術に自信がなかったことと、萩原翁の話を全面的に受け入れることができなかったことがその理由だ。

高橋喜久雄氏とは、それから間もないころ、ともに猿ヶ京のある場所を地中レーダーで探査したことがあったが、発掘をするまでには至らず、交流も途絶えがちだった。だが、

以後も協力して調査を行ったり、テレビ番組で顔を合わせる機会が多かったのは、徳川の御用金について、二人の考えが次の点で一致していたからだ。

「幕府の主戦論者たちは、計画段階では赤城山麓への埋蔵を考えていたかもしれないが、最終的にはそこへ運ばれていないか、いったん運ばれた後、計画を変更してさらに北方へ移した。そして、一カ所ではなく数カ所に分散して埋蔵した。赤城より北方の旧街道沿いに残るいくつかの幕末の目撃談が、そのことを示唆している。また、総額三百六十万両とか四百万両というのは計画段階の数字であって、非現実的である。幕府がそれだけの御用金をかき集めることができたはずがない。さらに、埋蔵からときを置かず回収されたものもあると思われるが、いくつかはいろいろな事情で回収されずにいまだに眠ったままになっている。その総額は多く見積もっても十万両程度だろう。それでも現在の市場価格で二百億円は下らない」

二〇〇六年八月のこと、読売新聞夕刊の企画に合わせて、久しぶりに金山跡に行ってみることにした。トレジャーハンティング・クラブの仲間が二人同行、記者と計四人での山登りとなったのだが、途中の山道の様子がだいぶ変わっていたため、沢への入り口をまちがえて、遭難一歩手前のとんでもない冒険行になってしまった。とくに、迷い込んだ谷間から脱出するために、尾根をめざせばスキー場が見えるところに出るはずと、垂直に切り立った崖をよじ登った後、足もとを見下ろしたときは背筋が寒くなった。一歩踏み外せばまちがいなく滑落死。なんとか命拾いして、日没前に駐車場近くの林道へ出たが、ついに目的地へたどり着くことはできなかった。

このとき泊まった民宿で、萩原翁の訃報を聞いた。二カ月ほど前のことで、享年八十六歳だったという。時の流れの速さを恨んだが、思いがけないことに、萩原翁がぼくたちに向けた最後のメッセージが遺されていたのだ。知らされたのは、それから五カ月ほど後のことだった。

読売新聞の記事を読んで、今度はテレビ朝日の「スーパーモーニング」が同行取材を希望してきた。同年十月に現地へ。それが放送されたのは翌年の一月で、放送を見た高橋喜久雄氏から久しぶりに電話がかかってきた。

「八重野さんもまだ金山に興味をもっているんですか」

彼はまずそのことを確認してきた。当時、ぼくはまだ再開のプランを具体的に立てているわけではなかったが、何年か前から考えていたことを口にした。

「沢沿いの道から入ったのでは、必要な資材を運び込むことができないから、隣接するスキー場からのルートが使えれば、なんとかなるかもしれないんですけどね」

すると高橋氏は「実は」と切り出した。

「去年の秋に、亡くなった萩原さんの知り合いという人が私を訪ねてきましてね。初めて会う人ですが、遺言を伝えにきたというんですよ」

「遺言？」

よく耳にはするが、これまで身近に感じたことのない言葉だ。ぼくは黙って話の続きを聞いた。

昭和三十年代の半ば、萩原翁は山仕事仲間のH氏とともに金山の坑道内に入り、千両箱十六個を発見した。すぐに鎌田に伝わる幕末の目撃談と結びつき、それが徳川幕府の御用

金の一部だと思った。坑道の左奥の深い立て坑の底に置かれていて、一個だけは何とか回収に成功したが、H氏が誤って穴の底に落ち意識を失ったため、助け上げることができなかった。遺体はそのままになっているはずだから、まず彼の供養を頼みたい。そして、残り十五個の千両箱を取り出して、世の中の役に立ててほしい。

以上が遺言の内容だった。ぼくは萩原翁から直接聞いた断片的な話を、記憶の底から拾い上げていた。あいていた部分が一つずつ埋まり、描かれた図柄がそれとわかる形になってくるジグソーパズルのように、つじつまの合わなかった筋書きがだんだんみえてきた。

高橋氏の長男が聞いた金を溶かす話や「飛行機では金(きん)を運べないから、長崎から船で台湾へ渡った」などという話も、意味をもってくる。そうだ、きっと萩原翁は、回収した一個分の千両箱の中身、たぶん小判を、溶かして金塊に変え、台湾へ運んで換金し、それを資金にネパールでボランティア活動を行っていたのだ。ぼくが直接聞いた「金山の奥にあるのは十五個の千両箱」の謎も解けた。鎌田の目撃談は八頭の牛の背に二個ずつだったというから、なぜ十六個ではないのだろうと、ずっと疑問に思っていた。

「金井沢はまちがいないですよ。調査を再開しましょう！」

高橋氏の強い言葉に我に返り、なんと返したかは忘れたが、首を強く縦にふっていたことだけは覚えている。

金山跡までの沢沿いのルートは、麓の集落から二・五キロほど林道を登った奥にある駐車場を出発点とする、七、八百メートルの道なき道である。たいした距離ではないのだが、標高差が三百メートルあり、途中、高さおよそ五十メートルの滝がある。十四年もの間、工事の再開ができずにいたのは、このルートでの進入に限界を感じていたからだ。必要な資材が運べない。小物はリュックに入れて担ぐことができるが、両手をあけていないと滝の脇の崖を這い上ることができないので、ショベルやツルハシは佐々木小次郎の「物干し竿」みたいに背負わなければならない。坑口の上方から落ちてくる土砂を留める「土留め」の資材が必ず必要になる。そのことでぼくは頭を悩ませていた。

何かいい方法はないものかと、この数年間、ヒマさえあれば金井沢一帯の地図と航空写真を眺めていたところ、思いついたのが別ルートの開拓だった。もし、隣接するスキー場「ホワイトワールド尾瀬岩鞍」のゴンドラ山頂駅まで通してもらえるならば、そこから現場までは二百メートルほどで、しかも下りである。もともとはそのあたりに道がついていたはずなのだ。

二〇〇八年、ゴールデンウィークが明けるのを待って、ぼくは思い切ってスキー場に電話をかけ、支配人に事情を説明して協力を頼んでみた。もしいい返事が聞けなかったら、「千両箱が見つかったら大きな話題になって、全国から大勢の人がやってきますよ。夏場のアクティビティーとしての金山跡見学は受けるでしょうねえ」

という口説き文句を用意していたのだが、それを口にする必要はなかった。支配人は、「いやあ面白い。ワクワクしますね。喜んでご協力します。いまの時期、山頂駅までは雪上車で行けますから、何でも運んであげますよ」

と、嬉々とした声で答えた。ぼくは相手をハグしたくなる気持ちを抑えて、

「よろしくお願いします」

とだけ言った。

それからすぐ、仲間数人とホワイトワールドを訪ねた。まずは下調べ。山頂駅付近がどのようになっているのか、自分の目で見ておきたかった。支配人は思っていたよりずっと若々しく、実にさばけた人で、テキパキと従業員に指図をして、ぼくたちを雪上車に案内し、自分も乗り込んだ。

しかし、歓喜と希望にひたっていたのもここまで。山頂駅付近から金山跡までの下り斜面は想像を絶するほど急なうえに、背丈以上の熊笹にびっしりと覆われていた。熊笹をかき分けながら金山跡を目指し、ようやく辿り着くことはできたものの、予想していた時間の倍以上かかったし、これに参加した全員がすっかり体力を消耗していた。

「沢沿いの方がよっぽどまし」

そんな感想が口々に出た。

その年の十一月、スキー場がオープンする直前に、熊笹のない、もう少し歩きやすいところがないものかと、再チャレンジしてみたが、結果は同じ。みぞれが降り出したこともあり、いっそう厳しい山歩きになった。

「仕方がない、従来のルートを多少でも歩きやすくするしかないだろう」

そう決心したぼくたちは、翌二〇〇九年五月末から、まず下準備に取りかかった。都合のいいことに、最高の宿泊場所が用意されていた。萩原翁の住まいだったところだ。近くに住み、尾瀬の名ガイドとして知られている弟さんとも以前から交流があったので、相談すると、「兄貴のうちを使えば」と言ってくれ、わずかな光熱費を支払うだけで使わせてもらうことになった。

そこは、計画倒れだった民宿にするつもりで建てた家だから、小部屋がたくさんある。何といっても掛け流しの温泉つきだ。ときどき弟さんたちも利用するそうで、台所には炊飯器をはじめ、各種の鍋、フライパン、食器類は山ほどあるし、自由に使っていいと言われた調味料も揃っている。冷凍庫にはなんと熊の肉まであった。

肉や魚など、一部の食材は持ち込まなければならなかったが、春先から初夏にかけて、山登りのルート上には山菜類が無尽蔵にあった。ヤマウド、ミズブキ、ゼンマイ、コゴミ、タラの芽など。帰り道に摘んできて、おひたしや天ぷらにして食べるのだ。安上がりなのに、この上なくぜいたくな合宿生活がスタートした。

作業のほうは、最初に橋造りから始めた。雪解け水が激しく流れる沢の一カ所に、太い倒木を三本渡し、針金で縛った。そして、沢から五メートルほど上方の斜面に、できるだけ平らになるよう幅五十センチほどの道をつくった。ツルハシとショベルでならし、水気の多いところには平らな石を並べた。さらに、垂直に切り立った雌滝の脇の崖には、四段にわたってロープと縄ばしごを取りつけた。これでずいぶん登り降りが楽になった。続いて、ショベル、ツルハシ、じょれん、鍬、そり、ロープ、ブルーシートなどの道具と資材を運び込む。山には雪の重みで倒れた木がたくさんあるので、土留めは倒木を利用すればなんとかなる。

北斜面の現場は、まだ厚い残雪に覆われていたが、まずは試し掘りとばかり、感触を確かめながら二日間にわたって斜面を掘削。六月に入ったら毎週末に通う覚悟で、できれば梅雨入り前に決着をつけたかったが、そう簡単にいくはずもなかった。

六月初旬、十名の動員に成功し、本格的な発掘に着手。一九九二年から十七年間に崩れ落ち堆積した土砂の量は、想像するしかなかったが、厚みは約二メートル。斜面の五メー

トルほど前方から斜め下へ向かって掘り下げていくことにした。

掘り進めていくにしたがって、前方だけではなく、左右からも土砂が崩れ落ち始めた。そろそろ土留めをしなければならない。土圧に耐えられる直径二十センチ以上の倒木を選んで、枠を組んでいくことにした。最初は長さ二メートルほどの太い柱を二本、一メートルの間隔をあけて立て、上に丸太を渡して鳥居のようなものを作った。掘り進めながら、これをどこかの神社のように奥へ向かって並べていけば、土留めになるだろう。八本も並ぶと、まるで丸太小屋のような構造物になった。

2009年6月、本格的な発掘を開始

六月下旬の第三期工事は雨にたたられて、一日しか作業ができなかったこともあり、梅雨の間の一カ月は休み、七月下旬に作業を再開した。本格的な夏が訪れ、現場は木々の緑におおわれて薄暗い。カやアブに襲撃されるのはまだましだが、ときどきスズメバチが現れる。虫対策として、焚き火をたいて煙で追い払う作戦をとった。横穴を掘り進めるに従って柱も増やしていき、屋根にあたる部分にも細めの丸太をすき間なく並べて、上方からの土砂の崩落を防ぐ工夫をした。このころは、まさに一掘りごとに坑道に近づいていく感触があった。土や岩のすき間から風が吹き出したり、たばこの煙が吸い込まれたりするのは、坑道内のどこかに空気穴がつくられているからだと思われる。古文書にもそのような記述があったはずだ。

七月下旬、掘り出した土砂に、朽ちた木片が混じるようになった。古い坑木だ。坑口があくのは時間の問題となった。しかし、そこからがまた苦難の連続だった。以前に増して、大きな岩が行く手を阻むようになったのだ。ツルハシも役に立たない。そこで、石のみとハンマーでひたすら岩を割った。最前線は狭くなって、一人しか入ることができないので、交代で地道な作業を続ける。幸いだったのは、岩が比較的軟らかい堆積岩だったことだ。ここがかつて海の底だったときに、積もった砂が固まって岩となり、地下深いところから岩のすき間を伝って上昇してきたマグマの中に金が含まれていて、鉱脈となったのだろう。気の遠くなるような長い地球の歴史が頭をよぎる。

八月から九月にかけて、ほとんど毎週末、片品通いが続いた。五月からずっと、麓の萩原邸を合宿所にして現場に通っていたが、正念場を迎えて往復三時間の通勤時間がもったいなく感じられてきた。そこで、現場近くにキャンプサイトを開設することにした。キャンプ用の資材を持ち上げるのはそれなりにたいへんだが、一度がんばればなんとかなる。そのほかは条件が揃っていた。まず、有名ブランドとして売り出されているミネラルウォーターと、ほとんど同等の清水が流れる沢がある。燃料は無尽蔵。テント数張りが張れるスペースもある。

手分けしてキャンプサイトの設営を行ったが、ぼくはトイレづくりに専念した。少し離れた斜面に生える、根元が雪の重みでたわんだ木を利用し、細めの丸太を数本縦横に組み合わせて水平な床を作り、前面にはしゃがんだときにつかめる横木をとりつけた。下方の

斜面はえぐり、参加者が十人くらいいても、一回のキャンプで十分に処理できる溜め場とし、排泄物には落ち葉や草をかけることをルールとした。また、キャンプサイト側には立木にほかの常緑樹の枝をくくりつけて目隠しをし、女性の参加者でも安心して用が足せる場所にした。実際、八月から十月にかけて、三名の女性が参加、このトイレを絶賛していた。

さて、九月中旬のこと。前回の工事から一週間後、現場に来てみると、雨の影響もあって前面の壁がかなり崩れていた。そして露出した軽く一トンはありそうな大きな岩が、いまにも頭上からずり落ちてきそうな状況だった。（こりゃあたいへんだ）気分が滅入る。落ちてきた土砂の処理だけでもかなり時間がかるだろう。しかも、参加者はだんだん少なくなってきていた。みんな疲れているのだ。そのときはぼくのほかには二人しかいなかった。

それでも、必死に対策を練った。これ以上崩れたらお先真っ暗なので、木枠の上方の斜面に向かって、先をとがらせた長めの丸太を数本打ち込み、その上に土を詰めた土嚢を並べていった。斜面に露出した大岩も、これでなんとか止められる。一時しのぎかもしれないが、効果はあるはずだ。その作業中、前方の壁の一部がまたドサッと崩れた。これは逆に願ってもないことだった。そのあとに現れたすき間から、しっとりと水にぬれた坑道の壁らしいものが見えたのだ。

「やったぞ、貫通だ！」

たった三人だけだったが、大きな歓声が谷間にこだました。ほかの仲間に早く知らせたかったが、ここは携帯電話がつながらない。報告は下山してからだ。ただ、まだ人が入れる状態ではない。あいたすき間のど真ん中に、大きな岩が行く手を阻んでいた。中に入るのは次回に期待するしかなかった。

はっきりと坑道が見えてきたことで、高橋グループの面々のモチベーションも確実に上がり、翌週には大詰めの調査に十分なメンバーが揃った。

焦ってはいけない――。ぼくはそのことを肝に銘じていた。おそらくもう少しで目的のものが手に入る。だからこそ、ここで先を急ぎすぎてミスを犯してはならない。危険な要素は数知れずある。この山はもともと野生動物のすみかだ。夜は間近でニホンジカが鳴き声を上げる。ぼく自身が目撃したのはカモシカくらいだが、仲間の二人が巨大なイノシシに遭遇している。ツキノワグマがいるのも確実だから、いつも盛大に音をたてながら入山する。スズメバチ対策としての焚き火も忘れないようにしている。

坑道の入り口が見つかった瞬間

木枠を組んで、安全に工事を進めるメドがつく。

それ以上に気をつけなくてはならないのは事故だ。もし誰かが歩けなくなるほどのケガをしたら、山から下ろす手立てとしてはヘリを呼ぶしかない。だが、以前新聞社の取材で上空をヘリで飛んだときに、パイロットから気流が悪くて金山跡のある斜面に近づくのは難しいと言われたから、それも無理かもしれない。

目の前にある岩は差し渡し一メートルほどある。埋もれているから厚さも奥行きもわからない。これをどかすにはどんな方法がいいだろう。周りを棒でつついているうちに、押し込めば穴の奥に落ちるのではないかという感触を得た。念のため、岩の周りを太めの柱で補強し、狭くはなったが安全性を確保し、最後は手前のほうから太い丸太で岩を突いた。お寺の鐘を撞くときや、時代劇でよく見る、がんじょうな門を突き破る要領だ。

三人がかりで丸太をかかえ、かけ声とともに一回、二回、三回と突いた。五回目くらいだっただろうか、手にいい感触が伝わってきた。岩がズルッと前方に落下したそのあとに、漆黒の空間が現れた。今度は誰も声を出さない。当然の結果だ。お楽しみはこの先に待っている。

わずか四十センチ四方ほどのすき間から、高橋グループの横山氏に続いてぼくが腹ばいで中に入った。ポケットには線香ひと束とライター。H氏の遺体があったら、とりあえずその場で線香を立てる。その後どうするかは、遺体や遺留品の状況を見て考えるつもりだった。

身を起こすと、ヘルメットに取り付けたキャップランプと手に持つLEDライトの明かりに、坑内が照らし出された。なんという美しさだろう。高さも幅も二メートルは優にあり、ほぼ真四角に掘り進められていた。坑口付近は四百五十年も前に掘られたと考えられるが、したたり落ちる水のせいもあり、まるでいま掘ったばかりのように生々しい。保存状態が極めて良好だ。以前、佐渡金山や伊豆の土肥金山、兵庫県の多田銀銅山、島根県の石見銀山の坑道跡に入ったことがあるが、どこよりも立派だった。

昭和三年に行われた金鉱の調査記録によると、坑道はまず坑口からまっすぐ百五十尺（約四十五メートル）続いているという。そこで、ロウソクを五メートルおきに立てることにした。酸素の状態を確かめるためでもあるが、萩原翁からは奥は二股に分かれていると聞いていたから、ロウソクを十本立てれば分かれ道に達する計算になる。

実際には十本立ててもまだ先があり、さらに十五メートルほど、坑口からは六十メートル入ったところが分岐点になっていた。そこの天井の高さが五メートルほどあるのは、鉱脈を追って掘り進んだからだろうか。右側の通路は狭く、傾斜が上に向かっている。その先にきっと空気抜きの穴があるのだ。問題の場所は左の方。十メートルほどで行き止まりになり、深い立て坑があるはず。いよいよだ。

「ここか！」

先頭を進んでいた横山氏が声を上げた。しゃがみ込んでいたので肩越しにのぞき込みライトを向けると、確かにそこには深い穴があった。ただ、想定外だった

のは澄み切った水を満々とたたえていたことだ。
「何か沈んでいるよ」
横山氏の言葉におそるおそる身を乗り出す。水底に複数の黒々としたものが転がっていた。丸太のようなものは刻みのついた昇降用のステップだということはわかったが、はっきり箱と認められるものは見当たらない。
「ホトケさんは？」
線香を握りしめて問いかけると、横山氏は首を横に振った。
よく見ると、立て坑の底からさらに横穴が続いていることがわかった。足もとの方向だから死角になっている。身を乗り出しても限界があって、先をのぞき込むことはできそうにない。
「溜まった水を抜くしかないですね」
ぼくの提案に横山氏がうなづく。
翌週、現場には女性一人を含むトレジャーハンティング・クラブの仲間十二名と、高橋グループの三名、計十五名が揃った。一人一箱ずつ、千両箱を担いで下山する計画で、なんとかかき集めたギリギリの人数だった。担ぎ役のほかにもう一人、ぼくはプロカメラマンのK氏に同行を依頼した。坑道内の画像をきちんと残すだけだなく、もっと重要な撮影をやってもらうためだ。
めでたく千両箱を発見したときにどうするかについて、日本トレジャーハンティング・クラブと高橋グループの間では合意ができていた。大前提は公開すること。そして、ぼくたちに所有権が認められたとしても、それを放棄し、すべてが地元片品村に帰属する形にしたい。見つかったものが徳川の御用金の一部であるという推定は成り立ち、世間もそう見るだろうが、それを完全に証明する材料があるとは思えないし、ある筋を通して、徳川宗家が所有権を主張するつもりがないことを伝え聞いている。徳川幕府の御用金といっても、私有財産ではなく、当時の政権が保有していたものだから、いわば国家財産である。国は文化財指定を考えるかもしれないが、約三十億円で買い上げる予算もつかないだろうから、所有権はたぶん動かない。
そこで、村と協議のうえ、まず、記録映像とともに見つかったものの展示会を全国主要都市で開催し、そこで得られた資金をもとに、地元に常設の展示館を建設し、来訪者に見てもらえるようにする。村の名所が一つ増えるわけだ。そこの経営には、ぼくたちのグループも参加させてもらうつもりだ。
ただ、メンバーの一部に、所有権を放棄してしまうことについて多少の異論もあったので、ぼくは見つかったものがすぐに現金に変わるわけではないこと、現金が欲しいならほかに手があることを説明した。発見したものではなく、実績が手っ取り早く金になるということだ。そのために今回は、プロカメラマンの同行を依頼し、主要四社の缶ビールをそれぞれ数個ずつ現場に持ち込んだ。
千両箱が見つかったら、坑口の前に積み上げ、いちばん上の段の箱を開けて小判が見え

澄んだ水をたたえる縦坑の底に、いくつかの黒々としたものが沈んでいた。

るようにし、みんなでそれを囲んで歓喜の祝杯をあげる。四社分のＣＭ用の静止画と動画を撮影し、当然だが代理店を通さず、ビール会社の宣伝部と直接折衝する。複数の会社が手を上げたら競り合いになり、最後はもちろん一社に絞り込む。作り物ではない本物のシーンだから、ギャランティーはかなり高額になるだろう。Ｋ氏にもうまくいったときは破格の撮影料を支払うことを約束していたから、機材を大きなリュックに詰め、喜び勇んでついてきてくれた。もともと世界の山岳写真を専門にしてきた人だから、山登りは得意。ぼくとは何度か海外取材をともにした仲で、気心も知れている。本心は聞いていないが、たぶん話百分の一くらいの気持ちで来てくれたのだと思う。

さて、このとき、決着をつけるための道具として持ち込んだのが、手動ポンプと五十メートルのホース二本。手動ポンプはネットで探し当てたもので、災害時などに使うものだ。長さ一メートルほどのアームを上下させると、一ストロークで一・三リットルの水を吸い上げ、一分間に五十リットルの排水が可能だという。ちょっと重たかったが、発電機や電動ポンプよりはずっとましだ。ホースは、高橋グループの一人が水道工事の専門家だったので、口径だけを事前に知らせ手配してもらった。

ホースは本体につないで坑口から外に出し、さらに先端をずっと離れた斜面の下の方に持っていって固定した。先端はまちがいなく立て坑の高度よりも低い位置になる。サイフォンの原理で、全体に水が通ると、高い方から低い方へ自然と流れるというわけだ。このプラン通りに装置は働いてくれた。ポンプを三分ほど動かし続けると、ホースの先端から水が噴き出した。そのことを何人かが伝令となって坑内の奥に伝え、最終的にポンプを開放にして固定すると、あとは放っておいても排水されていった。

一時間ほど経過してから立て坑をのぞくと、溜まっていた水の半分は抜けた印象だったが、底の方ほど穴は広がっているから、そう簡単にはいかない。完全に水が抜けたのは翌朝のこと。計測すると、立て坑の深さは二・八メートルで、水深が二・五メートル。あとで計算してみたら、水の量はおよそ八立方メートルあった。

坑道探しを始めてから十七年、ぼくたちはようやくここまで辿り着いた。水底に沈んでいた昇降用のステップは腐食が進んで使い物にならなかったので、丸太を削って同じものを作った。それを穴の底に落とし込んで固定すると、ぼくは慎重に降下していった。水面からも見えていた黒ずんだ木片が折り重なっている。平べったい板もある。「箱のようなもの」を探したが、すぐには見当たらない。板や丸太をどけて下を探ったが、ない！　それに、千両箱とセットで存在するはずのホトケ様の姿も見当たらない。

（なぜだ？）

納得できない。自分自身にその理由を説明できない。穴の底がわずかに軟らかく、掘れそうな感じがした。

「掘ってみるしかないでしょう」

と、トレジャーハンティング・クラブの東（あずま）氏が率先して掘り始めた。

「おっ！」

東氏が一度だけ声を上げた。砂の中から黒っぽいが骨のようなものが出てきたときだ。しかしそれは木の根だった。

立て坑の底の調査は実質一日だけ。砂はまだ掘れそうだった。さらに掘れば千両箱が顔を出すのだろうか。結論は次回に持ち越された。

片品の山は十一月に入ると雪が降り始める。タイムリミットまであと半月。ぎりぎりまで引っ張ってきたメンバーの士気と体力は限界に達していた。「あと一回だけ」「最後の挑戦」という覚悟で臨んだ十三回目の調査行だった。

まず、立て坑のすみずみまで、突き棒や三本鍬を使って掘りまくる。ガリガリ、ゴリゴリという音が穴の底に響き渡った。道具の先が木箱に当たる「コツン」という音を期待し続けた。しかし、底にたまっていた砂の層もさほど厚くはなく、まもなく床のすべてが固い岩盤におおわれる結末を迎えた。

「ここにはない」

そう考えるしかなかった。立て坑以外の場所にある可能性はないか、もちろんそのことも考え、最終日は坑道内のすべての場所を徹底的に調べて回った。しかし、考えてみれば、十五個の千両箱を置くにはかなりのスペースを必要とする。左奥の立て坑以外にそんな場所は見つからなかった。

結論として――

千両箱が見つからなかった理由は、次の三つのうちのどれかである。

1. もともと坑道内にはなかった。
2. すでにだれかが持ち去った。
3. 坑道内のほかの場所にある。

しかし、どれについても明確な説明ができない。1の場合はだれかがウソをついていることになるが、萩原翁にしろ、翁の死後にメッセージを伝えに来た老人にしろ、そんな手の込んだウソをつく動機が思いつかない。最も有力なのは2で、調査に参加したメンバー内では、立て坑に落ちて亡くなったはずのH氏が、実は生きていて、萩原翁の知らないうちにすべてを運び出してしまったのではないかという推論が支持されている。だが、もしそうだとしたら、狭い村の中だから、必ずウワサが立つはずである。あとは、依然として大量の土砂で大部分がふさがれたままの坑口付近に埋もれている可能性は残る。H氏がここまで運んできて力尽きたか、あるいは突然の崩落で埋もれてしまったか。以後、断続的に数回にわたって現地へ通い、坑口付近の土砂を片づける作業を行ってきたのは、その可能性が高いと考えてのことである。

その後やや時間が経過してしまったが、まだ金井沢に関しては決着がついていない。調査を再開するメドはまったく立っていないが、金山跡の歴史的遺産をあのまま放置しておくのはもったいないので、今後のこともいろいろ考えている。

実は、合宿所にしていた故・萩原翁の自宅の向かいに、当時村の観光課に勤めていた方が住んでいて、交流していた。そして金山の坑口があいた直後には役場に報告に行き、観光課と教育委員会の方を現場に案内し、坑内に入ってもらっている。皆さん驚きを隠せない様子だったが、アクセス路もないことから。すぐに村でどうこうする予定も

2011 年に行った坑口付近の調査。以来、調査はストップしている。

立たず、いまのところはぼくたちの動向を見守ってくれているところだ。
　千両箱を発見したときにどうするかについては前述の通りだが、ぼくたちにはもう一つ別の計画がある。それは、金山跡を誰でも見学できるように、コースを整備するだけでなく、体験施設をつくることだ。最後まで掘った立て坑をはじめ坑道内の各所に、素人目にもそれとわかる金鉱脈がまだ残っている。一部を削り取って持ち帰り、分析してみたところ、金が含まれていることは確認ずみ。だからといって、金鉱山として商業ベースにのせるのは無理だと思われるので、この歴史的遺産をちがう形で現代に活かすのだ。具体的には、来訪者が坑道内で金鉱石を採掘し、石臼が転がる選鉱場跡を復元して、そこで昔と同じやり方で選鉱を行う。採れた金は持ち帰りができるようにすれば喜ばれるだろう。いっぺんに大人数は入れられないので、人数限定で完全予約制。案内と選鉱指導を兼ねるインストラクターをつける。インストラクターの養成にはぼくも一役買うつもりだ。
　最大の問題は、金山跡へのアクセスルートである。スキー場からの道を、熊笹を刈って整備すれば年配の人でもラクに行けるようになるだろうが、沢沿いの道も捨てがたい。初夏には山菜採り、秋はキノコ狩りが楽しめるし、ヤマブドウを摘んだり艶やかなトチの実やハシバミ（ヘーゼルナッツ）の実を拾ったりもできる。おまけに沢はヤマメの宝庫。楽しいことだらけで、一日中飽きることのない山の体験が可能だ。ただし、ここが野生動物のすみかであることを十分に認識して、人間はちょっとお邪魔するだけという姿勢を忘れてはならない。絶対に環境破壊を起こすことのないよう、あらゆる面に配慮すべきだ。
　という具合に、後のことはいろいろ考えているのだが、その前に、どうしても決着をつけたい。ここは、すぐれた嗅覚をもつ本物のポチを探し出して現場に連れて行き、千両箱のありかを教えてもらうしかないのだろうか。それとも、卓越した分析力、推理力を備えた人がぼくの前に現れ、新しい視点で千両箱の有無を判断し、あるとしたらどこを探せばいいのか、適切なアドバイスをしてくれるのを待つべきなのだろうか。